

## 明性寺本仮名書き『往生要集』の仮名遣

——浄福寺本仮名書き『往生要集』、

蓮如「御文」の仮名遣との対比による考察——

西 田 直 敏

### 一 はじめに

明性寺本仮名書き『往生要集』は、滋賀県日野町の明性寺に所蔵されている。『往生要集』を漢字片仮名の訓み下し文にし、漢字の殆ど全てに片仮名の振り仮名が付けられている。全十二巻あったものが、現存するのは十巻のみである。注意すべきは、各巻末に「此抄本江州栗本郡安養寺釈浄性依所望書写畢 于時享徳三年甲戌卯月十七日」の識語があることである。享徳三年は一四五四年である。安養寺から明性寺に所有が移ったものであるが、漢文の『往生要集』の仮名書き訓み下しを求めた「釈浄性」は僧侶であろう。所望された人物は不明であるが、この『往生要集』を納めた函に、「蓮師御筆」とある。「蓮師」は、本願寺第八世蓮如である。蓮如が第八世に就任するのは、父存如の死（長保元年一四五七）によってであるから、享徳三年は、その前のことになる。「書写畢」と記されているから、自ら書いたということであるが、署名は無い。

私は、平成六、七年度、科学研究費補助金を交付され、『明性寺本仮名書き往生要集』を中心とする往生要集訓読史の国語学的研究』（課題番号〇六六一〇四〇一）を行い、既に報告書も公刊したが、本稿は、その研究の続稿というべきものである。

本稿では、まず仮名書き『往生要集』の鎌倉時代成立と考えられる京都浄福寺本と明性寺本との仮名遣について対比し、明性寺本の仮名遣の特色、時代性を明かにし、次に、蓮如の「御文」の仮名遣と比較することによって蓮如筆の可能性を検討してみようとするものである。

## 一 浄福寺本仮名書き『往生要集』の仮名遣

浄福寺本仮名書き『往生要集』の仮名遣の概略については、既に、西田直樹・西田直敏編著『浄福寺本仮名書き』影印・翻刻・解説』（おうふう 平成六年）において述べた。

その後、同本の総索引を作成した（未公刊）。以下、その総索引によって、まず、歴史的仮名遣（字音仮名遣を含む）と異なる語の一覧を示し、その下に、歴史的仮名遣と定家仮名遣（行阿の『仮名文字遣』）を示すことにする。漢字見出しの下のカタカナは振り仮名である。なお、浄福寺本に濁点は付されていないので振仮名はその形で示す。

浄福寺本表記	歴史的仮名遣	定家仮名遣
あえれども（会）	あへれども	あふ

悪業 アクコウ

あつめおさむる

いる(飯)

いゑ(家)

いきをひ

いちをん(一音)

いちごう(一劫)

いでおはりて

うゑ(8例)(上)

うへ(41例)(上)

優曇華 ウトンクエ

うるをす(潤)

うれうる(憂)

うれゑ(1例)(憂)

うれへ(3例)(憂)

あくごふ

をさむる

いひ

いへ

いきほひ

いちおん

一ごふ

いではり

うへ

うどんげ

うるほす

うれふる

おさむ

いひ

いへ

いきほひ

おん

をはる

うるほす

うれふる

うれへ

---

贈	億	をく	おく	おほえる・おほふ	往生要集	をいて	おるたり	おひぬ	往処	をふ	おふ	をいて	おいて	閻魔羅王
ヨクリモノ	ヨク	(1例)	(2例)	おほふ	ワウシヤウエウシユ	(1例)	(1例)	(2例)	オウシヨ	(1例)	(1例)	(3例)	(16例)	エムマラワウ
		(置)	(置)	(覆)		(老)	(老)	(老)		(追)	(追)	(於)	(於)	

---

おく	おく	おほへる	わうじやうえうしふ	おひ	わうしよ	おふ	をいて	えんまらわう
おく	おく	おほへる	わうじやうえうしふ	おひ	わうしよ	おふ	をいて	えんまらわう

---

をくりもの	をく	おほふ	おい	をふ	をいて
-------	----	-----	----	----	-----

---

---

恩 ヲ ン	おはる (36例) (終)	をはる (9例) (終)	をもち (1例) (重)	おもき (3例) (重)	をなじ (9例) (同)	おなじ (20例) (同)	をしころす	をちおそれて	をこる (2例) (起)	おこる (7例) (起)	をこす (5例) (発)	おこす (18例) (発)
-------------	---------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	---------------------	-------	--------	--------------------	--------------------	--------------------	---------------------

---

おん	をはる	おもし	おなじ	をしころす	をちおそれて	おこる	おこす
----	-----	-----	-----	-------	--------	-----	-----

---

をはる	おもきの時はお也	をもし	おなじ事	をす	をその時はを	おそるの時お也	おこる	おこする
-----	----------	-----	------	----	--------	---------	-----	------

---

---

音楽	ヲンカク	音聲	ヲンシヤウ	飲食	ヲンシキ	飲酒	ヲンシユ	鬼	クキ	観世音	クワンセヲン	かんがへよ	(2例) (考)	かんがう	(1例) (考)	観音	クワンヲン	かわ	(河)	かるがゆへに	かたわら	(傍)	餓鬼	カクキ	きをひくらふ	(1例)	きはひきたりて	(1例)
----	------	----	-------	----	------	----	------	---	----	-----	--------	-------	----------	------	----------	----	-------	----	-----	--------	------	-----	----	-----	--------	------	---------	------

---



---

おんがく	おんじき	おんじゆ	おんじやう	がき	かたはら	かるがゆゑに	かは	くわんおん	かんがふ	くわんぜおん	き	きはふ
------	------	------	-------	----	------	--------	----	-------	------	--------	---	-----

---



---

おんじやう	かは	かんがへ	きおふ	きをひ	馬の時はを也
-------	----	------	-----	-----	--------

---

巍 クキく たる

鬼神 クキシム

帰 クキす

教法 ケウホウ

きはめて (8例)

きわめて (3例)

くいて (1例) (悔)

くるず (1例) (悔)

くひうらむる (1例)

くつは (轡)

くらひ (位)

紅蓮華 クレンクエ

化 クエす

花菓 クエクワ

花々クエく

ぎぎたる

きじん

きす

けうほふ

きはめて

くいて

くつわ

くらゐ

ぐれんげ

けす

けくわ

けけ

きはまる (極)

くひて

くらゐ

---

業報	高貴	業因	業	眷属	源信	快樂天	快樂	花葉	化仏	外道	決断	花台	花座想	花座
コウホウ	カウクキ	コウイン	コウ	クエンソク	クエンシム	クエラクテン	クエラク	クエエウ	クエフツ	クエタウ	クエツタン す	クエダイ	クエササウ	クエサ

---



---

ごふほう	かうき	ごふいん	ごふ	けんぞく	げんしん	けらくてん	けらく	けえふ	けぶつ	げだう	けつだん	けだい	けざさう	けざ
------	-----	------	----	------	------	-------	-----	-----	-----	-----	------	-----	------	----

---

くゑんぞく

---



黒業 コクコウ

答 コタウ

コタヘテ

獄鬼 コツクキ

罪業 サイコウ

罪業応報経 サイコウヲウ

ホウキヤウ

慚愧 サンクキ

三升 セウ

しゐ (聾)

殊勝殿 シュシヤウテン

枝葉 シエウ

焼 シヨウ

接 セウ

城郭 シヤウカク

こくごふ

こたふ

ごくき

ざいごふ

ざいごふおう

ほうきやう

ざんき

さんじよう

しい

しゅしやうでん

しえふ

せう

せふ

じやうくわく

こたへて

---

殺鬼	神通	身分	身相	津液	身	諸法	諸業	所帰	青蓮華	証拠
セツクキ	シンツウ	シムフン	シンサウ	シムエキ	シム	シヨホウ	シヨコウ	シヨクキ	シヨウコ	セウコ
	(3例)	(5例)	(3例)						(3例)	(1例)
	シムツウ	シンフン	シムサウ						シヤウレンクエ	
	(4例)	(3例)	(3例)							

---

せつき	じんつう	しんぶん	しんそう	しんえき	しん	しよほふ	しよがふ	しよき	しやうれんげ	しように
-----	------	------	------	------	----	------	------	-----	--------	------

---



---

撰  
セム

たうるる (倒) (1例)

たえず (1例) (堪)

たへざる (2例) (堪)

たへたり (堪任) (耐)

たへて (1例) (堪)

たえしのぶ (1例)

たへしのぶ (1例)

たえたり (1例) (絶)

たえざる (5例) (絶)

たへたり (1例) (絶)

たへざる (1例) (絶)

他化天 タクエテン

たましゐ (魂)

ちゐさし (1例)

せん

たふる

たふ

たゆ

たけてん

たましひ

ちひさし

たふる

たへたり

たえて (絶)

たましひ

ちいさし

---

ちるさき (2例)	畜生道	チクシヤウトウ
	朝謁	テウエツ
ついえ (費)		
ついに		
問		
トウ		
稲葉	タウエウ	
とほく (2例) (遠)		
とをく (2例)		
とほし (1例) 通		
とをす (5例)		
とほる (1例)		
ととのをて (1例)		
ととのほりて (2例)		
内外	ナイクエ	

---



---

ちくしやうだう					
てうえつ					
つひえ					
つひに					
とふ					
たうえふ					
とほし					
とほす					
とほる					
ととのほる					
ないげ					

---



---

ついえ				
ついに	つるとも			
とひて				
とをし				
とほる (通・徹)				

---

なを

なをし

なは (5例) (縄)

なわ (5例)

なんぢ (15例) (汝)

なむぢ (5例)

人間 ニンケン (5例)

ニンケム (3例)

ねがふ (4例) (願)

ねがう (1例)

白 ヒヤク らう

変化 ヘンクエ

変 ヘム ず (1例)

法 ホウ

法音 ホウオン

なほ

なほし

なは

なむぢ

にんげん

ねがふ

ひやくらふ

へんげ

へんず

ほふ

ほふおん

なは

ねがひて

---

宝花	ホウクエ	ほのほ	(2例)	炎	命終	ミヤウシユ	無間	ムケン	(4例)	めしゐ	(盲)	もよをす	(催)	問答	モンタウ	ゆへ	(67例)	(故)	龍鬼	リウクキ
方法	ハウホウ	ほのを	(25例)		名花	ミヤウクエ	ムケム	(2例)		妙花	メウクエ	もよをす								
法華經	ホツクエキヤウ																			

---

ほうけ	ほうはふ	ほうけきやう	ほのほ	めうけ	みやうけ	みやうしう	むげん	めしひ	もよほす	もんだふ	ゆゑ	りうき
-----	------	--------	-----	-----	------	-------	-----	-----	------	------	----	-----

---

ほのほ	めしひ	めしゐとも
-----	-----	-------

---

歴史的仮名遣と異なるものを抜き出してみた。浄福寺本の筆者（後京極良経説あり）は、藤原定家のように、自らの仮名遣説を持つ人ではなかった。同一語に二通りの書き方をかなりしている。たとえば、「上」を「うへ」「うゑ」、「於て」を「おいて」「をいて」、「終る」を「おはる」「をはる」、「同じ」を「おなじ」「をなじ」など、両者それぞれに相当数の用例があるところから、その時の気分次第という感じもする。漢字音の表記については、「花」「華」は「クエ」、「鬼」は「クヰ」、「化」は「クエ」、「貴」は「クヰ」、「愧」は「クヰ」、「業」は「ゴウ」、「法」は「ホウ」の如く一貫している。漢字音についての意識をはっきり持っていた人物であると思われる。が、「ム」と「ン」については、鎌倉時代には、あいまい化していたために、一見、書きわけがあるようであるが、実はない。その例が「人間」を「ニンケン」「ニンケム」である。次に来る語音との関係で「ン」と「ム」の別が示されているかと思えば、「ニンゲン」5例、「ニンケム」3例、全て用例は「人間の」である。従って、「ン」と「ム」には、書き分け意識はないということになる。ただし、浄福寺本の筆者は気分のままに書いたのではなく、仮名遣に古めかしい、伝統的なものを感じていた節がある。定家が『下官集』に「古人之所用来」と記しているように、古来の

臨終	リムシユ	りんじふ
蓮華	レンクエ	れんげ
蓮華台	レンクエタイ	れんげだい
老	ラウ	ろう
感業	ワクコウ	わくごふ

習慣とを考えていたらしい。院政期に「お——を」「え——へ——ゑ」「ひ——る——い」が同音になったためにかえて、「ゑ」「ゐ」が多く使われるという現象を生じている。「いる(飯)」、「いゑ(家)」、「うゑ(上)」、「うれゑ(憂)」、「おゐたり(老)」、「くゐず(悔)」、「たましゐ(魂)」、「ちゐさし(小)」、「めしゐ(盲)」など。

### 三 浄福寺本と明性寺本の仮名遣対比

浄福寺本は、鎌倉時代の書写であると推定される。明性寺本は、一四五四年の書写である。浄福寺本は、雲母入りの紙を用いた華麗な本であつて、優美な字様である。明性寺本は、僧の読解、読誦のために書かれた本である。両者の年代差は、正確にはわからないが、百数十年の差があらうかと思われる。

今、仮名遣について、調べてみよう。前章で述べた如く、浄福寺本には、特に一定の仮名遣によつて記そうという特別な意識はない。明性寺本も同様であらうかと思われる。両書とも、漢文の『往生要集』を書き下し文にしたものであるから、同一箇所を対比してみれば、それぞれの特色が明かになる。卷上の序と「大文第一 厭離穢土」の地獄について、調査した結果、語と仮名遣を五十音順に対比して示すと、次のようになる。右に(浄)として、浄福寺本、平仮名表記、左に(明)として、明性寺本、片仮名表記で記し、違いのある点に傍線を付して示す。浄福寺本、明性寺本ともに濁点は付されていないので、濁点なしの形で示す。

(浄)	あにあへんや	(浄)	あるいは	(浄)	いのち	(浄)	因縁 <small>インエン</small>
(明)	アニアエンヤ	(明)	アルヒハ	(明)	キノチ	(明)	因縁 <small>インエン</small>



(明) (浄)  
 穢<sub>エ</sub> 土<sub>ト</sub> 穢<sub>エ</sub> 土<sub>ト</sub>

(浄) われにおいて  
(明) ワレニヨキテ

(明) | 送りて  
ヲクリテ

(明)	(浄)
ヲナシ	おなし
	(同)

（明）	（浄）
ヲ ホ シ	お ほ し

(明) およふ (及)  
ヲヨフ

(明) (浄)  
 穢<sub>エ</sub> 土<sub>ト</sub> 穢<sub>エ</sub> 土<sub>ト</sub>

(浄) われにおいて  
(明) ワレニヨキテ

(明) | 送りて  
ヲクリテ

(明)	(浄)
ヲナシ	おなし
	(同)

（明）	（浄）
ヲ ホ シ	お ほ し

(明) およふ (及)  
ヲヨフ

(浄) くゐすして  
(明) 悔<sup>クヱ</sup>サリシ

明	浄
カワ	かは
	川

（明）（浄）  
血<sup>クエツ</sup>肉<sup>ニク</sup> 血<sup>ケツ</sup>肉<sup>ニク</sup>

(明) (浄)  
 獄鬼 コクキ 獄鬼 コクキ

(明) (浄)  
 他化天 タケテン  
 他化天 タケテン

（浄） とりおはて  
（明） トリヲハリテ

淨福寺本筆者の仮名遣について、前章で、特別な仮名遣の主義は持っていないが、漢字音の表記については、「貴クキ」「化クエ」「華クエ」「鬼クキ」「音ラン」など意識的であり、統一的表記が行われているとした。この淨福寺本と明性寺本とを対比してみると、明性寺本の筆者は、「アエン」、「ウバエル」、「ウエ」、「〇エド」、「エン（得）」、「カナエ」、「カエリミ」、「キエツキ」、「シリエ」、「サエタル」、「トナエ」、「マジエ」、「ヨミガエル」など（今、読みやすくするため、濁点を付して示した）、異様なくらい、「エ」を多用している。また、淨福寺本では「お」表記の語を明性寺本では「ヲ」で表記しているのが目立つ。「ヲキテ（置）（於）」、「ヲカサズ」、「ヲクリテ」、「〇ヲシエテ」、「ヲソルベキ」、「ヲツ」、「ヲトス」、「ヲナジ」、「ヲノく」、「〇ヲハル」、「ヲホキナル」、「ヲモテ」、「ヲモムク」、「ヲヨブ」（以上、〇印は、歴史的仮名遣と一致するもの）。言ってみれば、変った、印象的な仮名遣である。一種の傾向、「エ」「ヲ」について、特異な傾向を感じさせられる仮名遣であると言ってよさそうである。

## 四 蓮如『御文』の仮名遣と明性寺本の仮名遣

明性寺本の仮名遣がかなり特異なものであることを、前章において示した。伝えられているように、明性寺本が「蓮師」即ち蓮如の書写したものであれば、蓮如の文章を検してみれば、仮名遣を通して、蓮如筆であるか否か、その可能性の蓋然性を確認できる筈である。蓮如には、数多くの「御文」が残されている。

『御文』については、年代順に編集した稲葉昌丸編『蓮如上人遺文』（法蔵館 平成九年第六刷）が便利であるが、蓮如の仮名遣については、テキストの選り方と表記の調査に慎重さが要求される。同書の「解説」に、次のように記されている。

蓮師はその時代の慣習によりて仮名遣には比較的無頓着であつた。それで『高田御文』編集に際しては仮名遣を一定せんとする意向があつたと見えて、種々の点で之が見認められる。中にも著しきは、於を蓮師は多くの場合にオイテと書かれたのをライテと改めてある。尤もこの仮名遣の方針もその後多少の変化を経て、『五帖御文』と「高田御文」との間に左の如き差異が見出される。

於 <sup>ヲ、イ、テ</sup> ヲヒテ	願 <sup>子ガフ</sup> 子ガフ	加 <sup>クハエ</sup> クハエ	渌 <sup>サラヘ</sup> サラヘ	可笑 <sup>オ、カシ</sup> カシ	置 <sup>オ、ク</sup> ク	送 <sup>オ、クル</sup> クル	教 <sup>オ、シヘ</sup> シヘ	自 <sup>オ、ノヅカラ</sup> ノヅカラ	終 <sup>オ、ハル</sup> ハル
趣 <sup>オ、ムンキ</sup> ムンキ	及 <sup>オ、ヨブ</sup> ヨブ	愚 <sup>オ、ロカ</sup> ロカ	忽 <sup>オ、ロソカ</sup> ロソカ	参 <sup>マ、イル</sup> イル	幸 <sup>サ、ヒハヒ</sup> ヒハヒ	申 <sup>マ、ウス</sup> ウス	覚 <sup>オ、ボエ</sup> ボエ	聞 <sup>キ、コエ</sup> コエ	基 <sup>モ、トヒ</sup> トヒ
今宵 <sup>コ、ヨヒ</sup> ヨヒ	選 <sup>エ、ラフ</sup> ラフ	掟 <sup>ヲ、キテ</sup> キテ	同 <sup>オ、ナジ</sup> ナジ	落 <sup>ヲ、チル</sup> チル	起 <sup>ヲ、キル</sup> キル	通 <sup>ト、ホリ</sup> ホリ	直 <sup>ナ、ホル</sup> ホル	直 <sup>ナ、ホル</sup> ホル	

蓮如真筆の『御文』の現存するものは、稲葉氏によれば、五十四通である。真筆の『御文』における蓮如の仮名遣が、当時の一般的な仮名遣とかけはなれたものであって、異様な印象を与えるところがあったために、『御文』写本がまとめられた際に、仮名遣の統一、整理が計られたということであろう。なお、『高田御文』は、越後高田本誓寺の「十帖御文」。元禄頃までは、十帖あったが、享保二年（一七二七）には、三帖欠けて七帖になり、現存しているという。『五帖御文』は、證如開版本で、漢字仮名の使用に於て、蓮如真筆本に近いが、仮名遣は改めてあるという。

今、稲葉氏が真筆とする第29・30・33・35・36・39・40・41・42・45・50・55通の十一通（文明五年九月〜文明六年三月）について、仮名遣を調査して、蓮如の仮名遣の実態を明かにしようと思う。なお、『蓮如上人遺文』の「御文」第1通から第28通までは、全て写本である。表記については、第40通のみが漢字平仮名で、他は漢字片仮名であるが、ここでは、『蓮如上人遺文』をテキストに用いるので、同書の表記の通りに記すことにした。

### 第29通

こゝろゑがたき次第なり

おほせさだめられたり

一向宗といふことはおほきなるあやまりなり

つぶさにいへば浄土真宗といふ

他宗には宗の字にこりてつかふなり

（蓮宗本）

第30通

本宗において

いかやうなる子細にてさふらふやらん

こたへていはく

おほよす經文をみるに

一向專念無量寿仏とときたまへり

もはら无量寿仏を念ずるといへるころによりて、

子細もなくきこえたり

開山においては……浄土真宗とこそおほせられたり

雑行をゆるすがゆへに

雑行をきらふがゆへに

このいはれあるがゆへに

真の字をくはへて

分明にきこえおはりぬ

くはしくうけたまはりはんべらんとおもふなり

当流のおもむきは

その信心といふは

なにのわづらひもなく

これをもて安心決定とはまふすなり

たゞとなへてはたすからざるなり

そのおしへをうけて

これすなはち

(行徳寺蔵真筆本)

第33通

当時門徒において

そのいはれは

いみじくおもはれんずるが誠に仏法の肝要たるやうにこゝろえおきたり

つゐに天間三途にしづまん

その信心といふことはかつて是非の沙汰におよばざるあひだ

真実の極樂往生をとぐべきいはれなるがゆへなり

(茨城別院蔵真筆本)

第35通

筆をそめおきつる文どもなり

文牒のおかしきこともありぬべし

その斟酌をなすといへどもすでにこの一帖の料紙をこしらへて書写をせしむるあひだちからなくまづゆるしおくものなり

これをそなへらるべきものなり

(西光寺蔵真筆本)

第36通

心得のとほり

そのすえぐ門徒までも

ならはぬすまゐをするによりて

本病のおゐ物なんどもいたくおこりて

徒に日月をおくりなんとする事

まづ歸坊せしめおはりぬ

冬の路次中難義なろうへ命をかぎりに

当年も此方において

藤嶋よりかへりてのち心にうかむとをりかきしるすものなり

(行徳寺蔵真筆本)

第39通

その御恩をおもんじ申さぬ人これあるべからず

大儀のわづらひをいたされて

御仏事を申ッるといふとも



水いりてあかおちずなんどいへる風情

そのゆへはまづ他力の太信心といへる事を決定してのうへの仏恩報尽とも師徳報謝とも申べき事なり  
しかりといへども

あひかまへて明日より信心決定せしめ給はゞ

聖人の報謝にもあひそなはりつくおぼへはんべれ

このおもむきをよくくこゝろゑられて報恩講のうちに

聖人の御素懷にもふかくあひかなふべきものなり

ながらへて

あふぞうれしき

のりにあひぬる身こそたふとき

又霜月にあはん事

第40通

報恩講の間に……信心決定し給へる由きこえたり

信心のみぞをさらへて弥陀の法水をながせといへる事のありげに候

よくくこゝろゑらるべし

そのゆへは

物なんどのいまはしくおもふ心は

ことに在家の身は、世路にはこりて、あるひは子孫なんどの繁昌をおもひ  
目にみえてあだなる人間界の老少不定のさかゝるとしりながら

三途八難にしづまんことをば

いたづらにあかしくらす

これつねの人のならゐなり

あさましといふもおろかなり

追徒まうす心

女人のためにおこし給へる本願

弥陀如来の御方便よりおこさしむものなりとおもふべし

信心をゑたる人

このくらゐを

かくのごとく心ゑてのうへの称名念仏はわれらが往生をやすくさだめ給へる

これについてまづ当流のおきてをよくくまもらせたまふべし

そのゆへは、あひかまへていまのごとく信心をゑたまはば、一心のうちにふかくおさめおきて他宗他人に対し

て、そのふるまゐをみせず

さのみおろかにすべからず

信心のかたもそのふるまゐも

聖人もよく心ゑたる信心の行者なりとはおほせられたり

当山の多屋内方へまひらせ候

なをく不審の事候はゞかさねてたづねとはせたまふべく候  
 弥陀のちかひ  
 かきおきのりのことのは

(行徳寺蔵真筆本)

# 第41通

その信心といふはなにの用ぞといふに弥陀の浄土へまひりなんずるための出立なり  
 諸神諸菩薩において

こゝろをうしなひ、又わろき自力などいふひがおもひをもなげすて、  
 すてたまはざるものなり

ねてもおきてもつねにまふす念仏は

かやうにこゝろゑたる人

このほかになを信心といふことのありといふ人これあらば、おほきなるあやまりなり

この文にしるすところのおもむきは

この分をよくくこゝろゑたらん人々はあひかまへて

一切の諸法においてそしりをなすべからず

当流のおきて

聖人のいはく、たとひ牛ぬす人とはいはるとも……とこそおほせられたり

(行徳寺蔵真筆本)

第42通

是は聖教よみのわろきをなをさむが為也  
いはれをくはしく存知すべきなり

そのゆへは、罪をいへば

当国加州兩國の間に

そのことばあひかはれりと云

法流を相承なきいはれなり

あるひは聖道のはて

なまじゐに白骨に了簡をくはへて人をへつらひたせるいはれなり

往生の正業とすとみゑたり

善導此南無阿弥陀仏の六字を釈してのたまはく

南無といふはすなはちこれ帰命なり

光明のなかにおさめおきてすてたまはざるなり

このおもむきをよくこゝろゑたるをもて

このうへの行住座臥の念仏は

此外になほふかき信心といふいはれあり

## 第45通

すたれたりといへども、いまだ当流の眞実の法義にはもとづかざりき  
吉崎の山上において一字をむすびて

およそ仏法のおもむきはひろまれるやうにきこえたり

あまねくしらざるがゆへなりとおもふべきものなり

弥陀の報土へはむまるゝものなり

わろき自力のひがおもひ

うたがひの心

その身を光明のなかにおさめとりて

すでに命おはりなば弥陀の報土へかならずむかへ給べし

かくこゝろうるうへには、たとひ念仏まふすとも

かやうにこゝろゑたる人をは、あるひは一念発起の行者とも

なをこゝろうるべきむねあり

あながちにおろかにすべからず

よくこゝろのおもむきをこゝろすべきものなり

## 第50通

人々においては

ふかく心底にたくはゑて

此おもむきをもて

むなく地獄におちん事をかなしみおぼしめして

つゝに仏法にすゝめいれしめんための方便に神とはあらはれたまふなり

信ずるいはれのあるがゆへなり

弥陀一仏に帰したてまつればすなはち諸仏菩薩に帰するいはれあるがゆへに

先達よりうけたまはりつたへしがごとく仏智の不思議なりとこゝろゑて

そのときの命のぶれば、自然と多念におよぶ道理なり

一念往生治定のうへの仏恩報尽の多念の称名とならふところなり

外相において当流念仏者のすがたを他人に對してあらはすべからず

真宗の信心をゑたる行者のふるまゐの正本となづくべきものなり

(城端別院藏真筆本)

第55通

静におもんみれば

たとひ又栄花にほこり栄耀にあまるといふとも盛者必衰会者定離のならひなればひさしくたもつべきにあらず  
五十年百年のあひだのことなり

他力の信心をゑて

往生をとげんとおもふべきなり

才学もいらず富貴も貧窮もいらず

衆生を光明のなかに攝取してすてたまはずして

かならず浄土におくり給なり

浄土に往生する事のあらやうもいらぬとりやすの安心や

一心一向に如来をたのみまひらする信心一ッにて

あらこゝろゑやすの安心や

昼夜朝暮になふるところの名号

かへすぐ仏法に心をとめてとりやすき信心のおもむきを存知して

(行徳寺蔵真筆本)

蓮如真筆「御文」十二通の仮名遣をまとめてみると、次のようになる。番号は第何通を示す。○印は歴史的仮名遣と一致するもの。

。あはん 40 。あひかはれり 40 。あひかまへて 40 。あひだ 33 35 55 。あふ 40 。あらはす 50 。あらはれ 50  
あるひは 40 42 45 (定家仮名遣あるひは) 。いたづらに 40 。いはれ 30 33 42 50 。いへども 42 45 。いまはしく 40  
。いらぬ 55 。うけたまはり 30 50 。うしなひ 41 。うたがひ 45 。うへ 40 42 45 50 信心をゑたる人 40 50 55  
心ゑて 40 50 心ゑたる 41 45 。こころえ 33 。おいて 41 42 50 おる物 36 おかしさ 33 (定家仮名遣おかし)  
。おきて 40 。おくり給なり 55 。おこし給へる 40 おさめおきて 40 42 おさめとりて 45 おしへ 30 。地  
獄におちん 50 おはりなば 45 おはりぬ 30 36 。おぼしめして 50 。おほせられたり 40 。おもはれんずる  
33 。おもひ 40 41 45 。おもふ 30 45 55 。おもむき 30 41 42 45 50 55 。およそ 45 。およばざる 33 。およぶ 50 。

おろか 40 。おろかなり 40 45 。かきおきし 40 。かへすぐ 55 。きこえ 30 45 。くはしく 30 42 。くはへて  
 30 42 。くらゐ 40 。こしらへて 35 さかゐ 40 。しづむ 40 すえぐ 36 。すすめいれ 50 。すてたまはざ  
 るなり 42 。すなはち 30 42 50 。そなへらる 35 。そめおきつる 35 たくはゑて 50 。たとひ 41 45 55 たのみ  
 まひらする 55 。たふとさ 40 。たまふ 50 。たまはざる 41 。たまはず 55 。たまへり 30 。ちかひ 40 。つい  
 て 40 。つたへし 50 つゐに 33 50 。といへども 35 。となふる 55 。となへて 30 。とはせたまふべく候 40  
 。とほり 36 。なほ 42 なを 41 なをく 40 45 なをさむ 42 なまじゐに 42 。ならはぬ 36 。ならひ 42  
 55 ならゐ 40 。のたまはく 42 ふるまる 40 50 。まうす 40 まふす 30 41 45 。まづ 35 36 39 まひらせ候  
 40 まひりなん 41 。へつらひたる 42 。みえて 40 みゑたり 42 。むかへ給べし 45 。むまるる 45 。もと  
 づく 45 そのゆへは 40 ゆへ 30 33 36 39 40 42 45 50 。わづらひ 30 39

蓮如真筆「御文」の五分一程の範囲であるが、「まうす」「まふす」、「なほ」「なを」、「みえて」「みゑて」な  
 ど、ゆれのあるものもあるが、語頭は全て「お」であって、「を」は用いられていないのように一貫したものであ  
 る。語としては「あるひは」、「うへ」、「いはれ」、「すなはち」、「おもふ」、「たまふ」、「となふ」など必ず「は」行  
 を用いているもの、「信心をゑたる」「心ゑ」のように「ゑ」を用いているもの（但し「こころえ」33あり）など、  
 用い方に一定の傾向が見てとれる。蓮如の仮名遣は蓮如自身については『蓮如上人遺文』にいうように「仮名遣に  
 は比較的無頓着であった」というようなことは必ずしもなく、蓮如が和歌を詠んだということもあって、「は行」  
 の語などについては、仮名遣意識もあつたと思われる。また、語頭には「お」を用いて「を」を用いないというの  
 も一種の仮名遣意識とも見られる。当時の発音では、語頭の「お」は〔no〕であつた。但し、一貫した一定の仮  
 名遣意識を持って蓮如が書いていたかと言えば、半年あまりの間に書かれた十二通の「御文」に、ゆれのある語が



数語見えることから、そうは言えない。「御文」の写本に、仮名遣の相違したものが多いの、つい筆写者の仮名遣で写してしまったか、更に、後に、『遺文』の説くように仮名遣の統一が計られた結果である。それだけ蓮如の仮名遣が当時一般に行われていた仮名遣と異なるところがあったと言える。

さて、明性寺本の仮名遣と蓮如の「御文」真筆の仮名遣を比較してみると、「ヲ」「を」と「オ」「お」、「エ」「ゑ」と「エ」「え」「へ」「へ」において対照的とも言える大きな相違がある。この違いは、同一人物が仮名遣において、かくも違った書き方をする筈がないと思われる程である。但し、既に指摘しておいたように（拙稿「明性寺本仮名書き『往生要集』について『甲南国文』第43号 平成八年三月」、明性写本は、片仮名字体の異りから複数の人物によって書写されたことが明かであるので、主として書写の作業に当たった人物が蓮如であったかどうか確証はまだない。また、この時に、『往生要集』の振り仮名つき訓み下し文が存在していて、それを傍において書写した可能性が大である。その訓み下し文が誰の手になるものであったかも不明である。が、仮名遣の特色から見ると、その人物（訓み下し文の作成者、明性寺本の主たる書写者）が蓮如である可能性は薄い。明性寺本の函書きの如く、安養寺の釈浄性に与えた人物、この『往生要集』の書写を指揮して完成させた人物が蓮如であった可能性は残されていないわけではない。

## 五 お わ り に

明性寺本仮名書き『往生要集』は、書写の年月日が明記されていて、この本を与えられた人物もはっきりしている点で、大変貴重な資料である。宗教的には、「蓮師御筆」と伝えられている点で、重要なものであろう。

本稿では、仮名遣という視角から明性寺本を解析してみようとした。

まず、明性寺より早い時期のものとして、浄福寺本仮名書き往生要集の仮名遣の特色を明かにした。次いで、明性本と浄福寺本の仮名遣を対比した結果、同様に、『往生要集』を訓み下し文にしたものでありながら、その仮名遣には際立った違いがあることを明かにした。明性寺本の「ヲ」「エ」の仮名遣には特異とさえ言えるものがある。この特異な仮名遣が蓮如真筆の「御文」の仮名遣に見出せれば、「蓮師御筆 往生要集」の函書きを実証する有力な証拠となる筈であった。が、解析の結果は、むしろ明性寺本の仮名遣と「御文」真筆の仮名遣とは、かなり距離の遠いものであって、とうてい同一人物の仮名遣とは考え難いものであった。

しかしながら、明性寺本の仮名遣は、確かに室町時代十五世紀半頃の京都・近江にこうした仮名遣をした人物がいて、周囲に影響を及ぼしたであろうと考えられるものである。この時代の仮名遣は、蓮如の「御文」も「無頓着」に書かれたと言われているが、本稿に示したように、解析してみると、ゆれも多少あるが一定の傾向、仮名遣と呼べるような方式も認められるのである。